H. v. Kleist と「Phöbus」誌（その3）

松　沢　芳　郎

1. Phöbus の編集の変更

1808年4月頃，Dora Stock が「v. Kleist 氏を私共はしばしば私共の家で見かけます」（L261）云々といったふうに Kleist の Dresden での生活を伝えている。彼の作品について人々は，「彼の Penthesilea は私が戦慄なしで聞けなかった怪物です。彼のこわれ甕はだらだら続き，永久に上品さのはめをはずしている贈呈劇です。彼の Marquise v. O. の物語を顔を赤らめずに読める御婦人はありません。この調子はどこへ続きますか？」（L261）と評し，Phöbus は一年以上続かぬとその短命が予見されている。

即ち A, Müller は3月29日に Müffling 宛に，「私が全く唯，二次的に独自に働いている Phöbus の編集の中で大きな変更が行われねばなりません，即ち Phöbus がその立派な目的に拘らず，はっきりした損失を受けるに違いない場合には，私は Phöbus の編集を一人で引き受けるより説得しようと思っています」（L258）と書いている。K自身は5月4日は「Phöbus は絶対売らねばなりません。委託販売などという事は全然考えられません。ですから，どんな犠牲にも甘んじなければなりません。我々の投資した資本金も，もし中止という事になれば消えてしまうでしょうから，（将来もずっと）Phöbus を維持する方法があり得る時に危険を賭してみなければならない〔でしょう〕。そうです，誹謗を避ける為に，我々はその上もし信用貸をしようという人があれば，損失の危険に対して保証書を書かねばなりません」（B130）と考えていて，Müller とKの Phöbus の維持に対する考えの違っていることが判る。Kは更にその考えを進めて5月7日に1803年2月の Wieland の紹介で知りあった出版主 G. J. Göschen に Phöbus に関して提案している（B133）。そして更に6月7日にKは J. F. Cotta に「(3)我々，即ち A. Müller と小生は，貴殿が Phöbus を今年引受けるのは不可能であるとおっしゃるので，少くとも，それを維持するのに必要なあらゆる世話をお願いします」（B134）と依頼する。

結局のところ Phöbus 第3号（1808年3月号）は4月末に出版されたが，例えば5月3日に Knebel あたりが「私が丁度受取った Phöbus の新しい巻は野暮と無趣味と要求の権化であります」（L214a）と批評しているし，Goethe も〔3日か4日〕に Knebel に「Dresden の人々と私はすぐに手を切りました。というのは私が A. Müller を非常に高く評価し，Kleist が普通の才能でないと思っているにも拘らず，彼らの Phöbus が一種の Phébus に移ってゆくだろうとすぐさま気がついたし，この≪嫌なら嫌と始めから≫というのが，念頭に置くのを忘れ勝ちな確かな格言だからです」（L246b）と言っている。この号には A. Müller は「Vorlesung über das Schöne」を，Kは「こわれ甕」断片と二つの寓話（「Die Hunde und der Vogel」と「Die Fabel ohne Moral」）をのせている。

2. **Käthchen v. Heilbronn**

Phöbus 4/5号（6月初旬に出たに違いない）にはKは「Fragment aus der Tragödie: Robert Guiskard, Herzog der Normännen」,「Epigramme」と「Fragment aus dem Schauspiel: das Käthchen von Heilbronn, oder die Feuerprobe」をのせている。

Wienへの旅行の途中 Tieck は1808年夏14日間 Dresden に滞在し，この町の Golden Engel 館で白面の青年 H. v. Kleist と会い，「本当の友情には至らなかったが」（L274b）知合となる。その時 Tieck のみたKは「中背でかなり頑丈な身体つきだった。彼は真面目で寡黙で，野心的なうぬぼれはみじんもないが，しかし彼の振舞には気品のある誇り高い様子が多くみえた。彼は Torquato Tasso の像と似ているように Tieck には思われた。そしてまた彼はこの Tasso のようにいくらか重い舌を持っていた」（L274b）のだった。しかしその Tieck がこの不幸な詩人の固定観念についてものべ，Kの「固定観念はそれほど異常に昂まるので，以前 Müller の妻を狂気のように愛して彼女なしでは生きられないと妄想し，本気で Müller を Dresden の Elbe 川の橋から落とそうとしたほどである」（L275a）とあの Müller とKとの争を裏付ける挿話を記している。そして Tieck はKと Müller との交際関係のため彼も Müller と親しくなった訳だが，Müller が不遜で高慢で，そして厭な奴だと感じている。

この出会いの際Kはその劇 Käthchen v. Heilbronn を完成させたところだった（L274a）。この「Käthchen」の中でKは Dresden の雰囲気，彼の故郷の風情を描いた。そして若いWieland の娘との体験もその中に織り込んだのだった。Kは Tieck に「Käthchen」を示し，色々と語り合った，そして Tieck はKに他の人々のいる前で「作品全体をいわば童話とか奇蹟の領域に落としこむ情景について私見をのべた」（L272)。Kはこの Tieck の言を非難だと誤解して，その場景を，Tieck がそんな事を予想もしなかったのに廃棄してしまった。Tieck はその場景が後に印刷されたものの中にないのに気付いた時，大変残念がっている。Tieck の記憶によるとそれは「Käthchen が第Ⅳ幕で岩の上に逍遙していると，下の水の中に水の精が現われ，歌をうたったり話しかけたりして彼女を水中に誘い込もうとするのだった。Käthchen は跳び込もうとするが，辛うじて侍女に助けられた。それより先彼女は Kunigunde の湯浴みする醜さを盗み見し，彼女は騎士をいかにしてこの怪物の手から救い出そうかと気も狂わんばかりに焦慮する」（L272）というのである。これは Kunigunde の戯画化された醜さをもっと動機づけさせ，この醜さを一層くっきり浮き立たせていたのである。そして Tieck はそのところから「その時再び石の下から泉が湧きでる」（L272）というすばらしい句をなお憶えていたのだという。とにかくKはこれを Tieck の意見によってだけでなく，何度も書き直したらしく「不運な Kleist が多くの場景を10度も書きかえた」（L273b）といわれている。

3. **Penthesilea の出版**

一方Kがすでに1807年12月，姉 Ulrike に「僕は3つの完成した原稿をもっております，そのどれもが我々の雑誌から期待している収入をもたらすでしょうし，僕はそのための金が欠けているので印刷できないのです。それでも復活祭には，そのうちの一つ悲劇 Penthesilea を出版するため充分用意ができていると考えております」（B119）と知らせたように，1808年復活祭後に「Penthesilea」が本として出版される筈だった。K達は自分達の本屋を持つ努

力が Dresden の本屋達の反対で駄目になったが，この Penthesilea は一応自費で Dresden の Carl Gottlob Gärtner によって印刷された。しかし丁度「Phöbus」誌の売行不振でそれ以上の Penthesilea への資金が尽きたため，Kは1808年6月7日に救いを Tübingen の Cotta に求めて次のように頼んだ。

「勝手ながら小生の持ちあわせているいくらかの原稿について次の提案を致します，(1)貴殿が悲劇 Penthesilea を出版しょうとなさるでしょうか，それはここでくわしく説明致しますと，すでに7折印刷されております。この最初の折帳の印刷は書籍商達を驚ろかせて，委託以外に作品を引受けるのをやめさせ，更には小生を，Phöbus が小生に使わせている大金がこの作品の印刷を続けるのを不可能にしました。Phöbus が断片を載せている戯曲の遅れての発表はこの文芸誌にとって結局致命的なので（ただそれだけを狙っているので），小生はこの状態で文芸そのものの歓心が心にあるどなたかに問い合わせねばなりません。もし貴殿が印刷費用を同封の見積りによって引受け，小生に作品の続きを送付しようと思われるなら，小生は1809年復活祭で，貴殿に謝礼の決定を全く任せ，それに対する信用貸を願う覚悟であります。委託に他ならぬなら，小生は貴殿が小生に 150 Rth. の立替金をお渡し下さるなら貴殿に作品を即座にお任かせし，1810年復活祭までの計算で信用貸を願うつもりであります。——小生はこの一点についてのお返事をすぐお願い致します。」（B 134）

同封の見積りは〔J. Baxa が証するところでは Müller の手になるものであるが〕次のとおり．

「Penthesilea の印刷の全費用は次の額になります。

1.	750部の搗き紙の写字用紙一部12折帳に，約19連，1連 6 Rth. 5gr.	118Rth. 23gr.
2.	印刷費　1折帳につき 5 Rth. 16gr.	68Rth.
3.	検閲の謝礼	1Rth.
4.	仮とじ製本1部毎 6pf.	15Rth. 15gr.
		計203Rth. 14gr.」（L 276 a）

これに対する Cotta の返事が7月上旬に来るまでの Penthesilea 出版についてのK達同人の努力をみると，例えば Müller が〔1808年7月初め〕K. Böttiger に好意ある援助の依頼の手紙を出している例がある。

「……我々は Phöbus が資金にあえいでいなくとも750冊の完本を送る事や印刷費を引受ける資力と縁故がございません。そのため v. Kleist 氏は印刷した本全部を印刷代に宛てておよそ 180～200 ターレルで売ろうと決心し，小生の留守中も Arnold 氏がその際の買値をつけましたが，しかし今までのところ決定をみていません。貴君は親友や後援者に対して親切ですばらしい方です，貴君の文学的名声はドイツでは有名です。…… v. Kleist 氏は報酬に譲歩しておりますし，文学仲間への送付に約20冊準備しております。恐らくドイツの本屋が一軒そのような条件で取引に応じ得るでしょうね」（L 277 a）。

しかしこの時点ではついに Cotta の返事が来ないままに，結局金を支出するあてもなく出版せねばならなくなった。それで完成した版は出版社名をただ「Dresden, gedruckt bei Carl Gottlob Gärtner」とだけつけられていた。そして Baron Buol-Mühlingen への献本や Friedrich Gottlob Wetzel 子爵への献呈本（いずれも7月にKが署名して贈呈）にみられるように，何らかの出版の援助を求めて送られたのだろう。そしてまた，そうした Cotta 出版の題扉をつけてなかった本が Böttiger にも送られ，それにはKの Böttiger の努力への感謝の手紙（7月27日）も添えられている。

「小生の敬愛の印として Penthesilea を送らせて頂きます。Cotta がこの作品の出版を引受けま

した。閣下の直接或いは間接の推薦がこの事実に関係あると信ずることは小生を満足させますので，小生はこれをもって閣下に対する心からの感謝と致します」（B135 a）。

しかし Böttiger はこの件について1808年10月21日に Cotta に宛てて Dresden から「私は貴殿が Kleist の Penthesilea の出版を引受けられたと聞いて驚きました。しかしそれは私の関係することではありませんし，沈黙しています」と書いている位であるから事実関係についてはどこまで信用してよいのか判らない例でもある。

さらに Cotta は引受けて出版した後，後悔したのであろうか，Tübingen の Cotta 宅で1808年冬 Varnhagen が Cotta と「発行された H. v. Kleist の Penthesilea について話しあった際，「この作品には不満足で，おそらく本を請求されないようにとその本を〔Varnhagen に〕紹介しようとしなかった」ようである。

いずれにしろ上述の手紙（B134）を Cotta は6月26日に受取りまず協力者たちに相談した。協力者の一人で新たに「Morgenblatt」誌の編集長になっていた Georg Reinbeck は「本屋が H. v. Kleist の悲劇の7折帳でおどされて，Kleist の契約を守るのは私の考えでは悪い徴候です。――全部が何の役にもたたないか，或いは恐らく危い事になる暗示を持っているからです。更に，H. v. Kleist は確かに良い頭の持主ですが，しかし彼は自分の事を吹聴するのを全く今日までまだ是認しませんでした。――〔……〕Phöbus は更に恐らく受け入れられ難いでしょう」（L276 b）と7月1日に Cotta 宛返事をしている。だがこうした警告にも拘らず，Cotta はこの作品を引受ける事を決心した。しかも彼の（現在残っている）7月9日付の返事で彼は原稿を見ずに引受けたのだった。（その引受けた手紙が7月第3週になってやっとKのところに到着した訳なので，それまでK達は色々な方面に出版を引受けさせる努力をしていたと考えられる。）それには次のKの感謝の手紙にもあるように Cotta は203ターラーの印刷費以外に 150Rth. の頼まれた前貸も承知したのだった。

「Penthesilea をお引受け下さいまして，小生は心からの感謝を致します。小生はこの度の色々の事情を考え合わせますと，今度のことは，専ら時代が支えられない作家を没落させないようにとの御好意から発しているものと確信をもって感じております，そしてもしこうした時勢なのに，小生が作家として生き抜く事が出来るなら，小生は全くのところ貴殿のおかげであると言わねばなりません。貴殿にはここにこの作品の一冊をお届け致します。別の3百がすでに Leipzig の Böhme 氏に送られました，50は Arnold がもちます。小生がお願い致しますのはただ，

(1) 第13折を（作品はただ12折をいれておりますので）ついでの際に，小生に送って下さる 353Rth. で清算すること。

(2) できるだけ速やかに Arnold 氏が当地で売却をすすめる事が出来るよう小売価格を決定すること。

(3) 残部をどこへ送るか決めること。です」（B135）。

これをみても判るように明らかにもはや当てにされていなかった為，Cotta の承諾が到着する前に，その本を印刷し終り，殆んど半分の部数もが他へ引き渡されていたのである。そしてまた印刷全紙の「12折帳」という申立てでも Kleist は間違っていて，出版された作品はきっかり12折帳（＝176ページ）で，それに後に張合わされたまだ綴じてない表題紙（いわゆる訂正ページ）があった。それにも拘らずKが印刷費概算に際して203Rth. 14gr. の費用が12折帳分をさしていたので1折帳を余分に勘定したのはもっともであった。

おそらく Dresden の顧客に50冊を自分で引受けた本屋 Arnold の援助で，Kは製本後すでに300冊を見本市 Leipzig に送っていた。それが今や Cotta の指示で，Leipzig の分も含めてまだ売れていない全てのものに，もともとの表扉紙を新しく Cotta 出版にするというので

ページ数のつけてない紙を「修正」で張りつけた。（贈呈本ではKは13頁と93頁の校正を自筆で行っていた。）もともとの表題紙をつけた版はKが Wetzel と Buol に贈呈した分だけ知られている。だが実際はその表題紙の違っているのも，飾りカット全ての交換が当時の印刷技術では活字の損傷で不可欠であったため，全体で4種の印刷の違いのあるのが生じた。

それは表題紙において紙の上半分が印刷上変らないままだったのに，出版社表示の相違が2種とぼかし図案を使ったのとそうでないもので4種の違いになる。

(1) Gärtner の（2行の）印刷記入の上に真中の方へふくれあがって，そこに5個の玉で区画されたカットがある。例えば Wetzel への献呈本。

(2) Gärtner の印刷記入の上に，網状にあけたふくらみをつけたカットがあるもの。このぼかし版の上に巾広い短い中央が濃くなった点があり，それは文章組板面を金の小口の関係で分けている。例えば Buol の献呈本。

(3) (2)の，今はしかし3行の Cotta の出版記入の同じカットのもの。

(4) (3)のように Cotta 出版記入がありながら(3)とは別の飾りをつけたカット，そしてそのふくらみは15の刻み目によって14の小さい黒い三角の区画に分けたもの。

9月の Leipzig の Michaelis 祭の記念大市にKの Penthesilea は出され，Böttiger は Cotta の「Allgemeine Zeitung」誌1808年9月19日号に「いくらか遅れて H. v. Kleist の Penthesilea もそこに現われた，その批評は天才的な憤激という事だった」（L279 a）と伝え，Reinbeck は同誌10月13日号に「我々はここで Cotta 社で出た興味ある補遺を加えうるのは嬉しい，……即ち Penthesilea, Kleist の悲劇」（L279 b）と伝えている。しかし作品を躊躇なく引受けた Cotta は前述のように余り好ましく思わず，Varnhagen の伝えるような挿話の示すような状態だった。そして自分のところで出版したにも拘らずなるべく紹介批評を避けて，やっと3月20日号に書籍の紹介批評の片隅に「Tübingen の J. Cotta 書店の出版物の中に1808年の Michaelis 以来1809年復活祭まで出た Penthesilea. H. v. Kleist の悲劇 Penthesilea, gr. 8. broch. 1Rth, 8gr, 2pf, 24kr. 著者の独創性がこの労作にも確証されている，そしてそれが少々奇矯に走り過ぎていなければということが望まれているだけである」（L279 c）とあるだけである。Kは Penthesilea の反響を待ったのだが，出版者の Cotta さえこの態度だったので無駄だった。その批評を聞きたい気持を，10月2日に一冊進呈した Wien の Collin に1808年12月8日に書き送っている，「小生が貴君の口に Penthesilea に関して，のぼっているようにみえる言葉を聞けばどんなに嬉しかったでしょう？ いささか厳しかったとしても！ というのは Käthchen の好きな人は Pentheilea は全然判ることが出来ないのです，両方がまるで数学の＋と－のような関係にあって，ただ対立した関係で考えられる同じものなのです。――もし貴君にその作品についてお考えになるひまがおありで，気が向いたら，思い切って小生に言って下さい，きっと小生には有益で好ましいものに他ならないでしょう」（B141）と。一般的にKの知人達の間では，嫌悪の感情をおこす Penthesilea は殆んど読まれず，そうした面を伝える Chr. G. Körner が息子に宛てた「同じような性質をもっている為，私は Penthesilea を同封します。私はそれを非常に興味をもって読み，その詩的な技巧を楽しみましたが，その中の多くのものが，それほど強く私に反対の印象を与えました」（L280 a）といったような考え方が普通だったのだろうが，Cotta から聞いた否定的な表現にも拘らず，Varnhagen が Rahel に宛てた「Kleist の Penthesilea からの文を添えます，私が以前（私はしかしまだ断篇だけしか知らなかった）全く盲目だった傑作です」（L280 b）といった感激の気持を伝えたものもある。この Penthesilea に対する評価は

1810年末に Goethe が「先日彼の Penthesilea を読んでいるうちに私は大変ひどく不快になって思わず襟をおおった。この悲劇は二，三ケ所で完全に喜劇的なものと隣り合っている，例えば Amazonen は乳房が片方で舞台に現われて，観客に彼女らの感情全てが第2の残った半分の乳房に移り住んでいるといって聞かせる所などがそれです，ナポリ風の国民劇場でひとりの恋人（Colombine）の口から，みだらな道化役（Polihinell）に向って語られる軽口としてなら，観客に格別のショックを与えずに済むかもしれない。ただし，そのような場合でも現実に乳房の一つしかない胸を観客の前で露出する事は絶対禁物である」（L281）と述べたことで当時評価は決定的に決まってしまったのである。

だから公けには Penthesilea ははっきり黙殺された訳である。Arnim がそれを「Heidelberger Jahrbücher」に論評する筈だったが載らなかった。Zschokke の「Miszellen für die Neueste Weltkunde」の論評ではKについては，それを利用する事で彼の天才が輝き出すまだあの豊かな世故経歴や世態人情の知識が彼に欠けているといわれている（L283)。匿名批評の「Nordische Miszellen」の中では特に悪く書かれている（L282)。

4. Phöbus の殁落

一般の読者にとっては1808年6月22日付 J. K. Manson の手紙「私は Phöbus には何を言いましょうか？ 輝くというより光り輝いておりますと……。事実その中に立派な論評が幾つかあります。或いは本当に素晴らしい A. Müller の考えが。しかしそれは非常に稀です。特に Kleist の劇創作があります……でも全体的には非常に冒険的です。我々の文学はそうしたものを扱うのは不可能です。」（L286 a）にみられるように Phöbus はまだ栄えているようにみえたのだろう。しかし内情は6月7日のKの Cotta 宛の手紙にあるように，それまで或程度順調にやって来た Phöbus の発行が難しくなって来ていたのだった。(Cotta は前述のようにこの手紙を6月26日に受取り，7月9日に返事し，それを見てKは7月24日に礼状を出している。）「(3) A. Müller と小生は，貴殿が Phöbus を今年中は引受けるのが不可能であるとおっしゃるので少くともそれを維持するのに必要なあらゆる世話をお願いします。我々は貴殿に5つの既刊号の批評（Fr. Schlegel，あるいはそれが不可能なら Dr. Wetzel によるよう願っておりますが）とそして第6号の内容広告（その中に Fr. v. Staël や Fr. Schlegel の寄稿がのるのですが）を Morgenblatt 誌で流布して下さるようお願い致します」（B134)。

批評は Schlegel によっても Wetzel によっても実際は書かれなかった。Schlegel は Phöbus には何も寄稿しなかった。第6号の約束された内容広告を Morgenblatt 誌は1808年12月22日になってやっと載せた。（これは第6号が11月中旬に発行された事にも起因するだろう。）Staël 夫人は Schillerの「Siegsfest」をフラン語に〔La fête de la victoie où le setour de Grees〕翻訳して寄稿した。

実際 Phöbus が7月に発行されなかった（6号は11月，7号は12月）ことやKの書簡（B134）にみられる状況は，7月4日に Fouqué (Nennhausen) が Varnhagen (Berlin) に書いている手紙で裏打ちされる。「さて一体 Phöbus の騎士達は経済的にもはや続けられないほど完全に破産しているか，或いは全く気が狂ったのではないでしょうか？ 一度 Reimer にそれを知らないかどうか機会をみて聞いて下さい」（L287 a）とある。更に Fouqué は7月23日に Varnhagen に「〔それで〕私は時には立派な Marquise v. O. の生みの親やその

忠実な協力者 Adam への質問を繰返したいのです。彼らは馬鹿ですか？　彼らは死んだのですか？　彼らは自分らの事はもう本当に全然聞かせないのですね」（L287b）と尋ねている。これに Varnhagen が8月3日に「A. Müller や H. v. Kleist について私は死んだという言葉は聞いていません。しかし彼らの死を信じなければならぬように思えます」（L287c）と答えるようなひどい状態になったらしい。8月13日の W. v. Pannwitz の P. v. Stojentin 宛手紙にも「その上恐らく Phöbus が悲惨な末路をとるでしょう，というのはあらゆる論評の中で Phöbus はこっぴどく酷評されています」（L288）とある。本当にKも姉 Ulrike に8月に Phöbus 苦境を伝えている，「丁度余りに多くの原因が今になるまで Dresden を離れるのを妨げております。Phöbus は出版界の絶対的不況にも拘らず今まで持ちこたえました，でも今もし戦争が起ればどうなるか僕は判りません。もしこの破滅的な時代が，真面目な，落着いた努力の成果を悉く破壊してしまう事がないなら，どれ位僕の境遇が良くて，僕の未来に開かれている希望がどれほど見込みがあるかを貴姉に得心させるのは僕に簡単でしょう。それでも僕が暮らしている条件はまだ耐えられますし，貴姉がた皆にはうまくいかない事を非常に怖れています」（B136）。

Phöbus の継続の努力は Collin 宛10月2日の書簡に「Hofrat Müller 氏は小生と同じく，もし公けの状態が許すならどうか〔貴君が〕Phöbus へ寄稿して下さるようにとのお願いを繰返しております」（B138）とあるようになされている。

この Phöbus の重大事におけるKの行動にはあちこちの旅行，そして Ulrike のK訪問がある。やはりこれは金策への努力とみてよいだろう。（Sembdner は政治的活動の一部と説明しているが。）それで8月の Ulrike 宛の手紙にまず，「ただ僕に ja という返事を決めて下さい，それ以外には何も必要ではありません，僕は貴姉に，貴姉が Wormlage に出す使いに，更に余り遠すぎる為に Gulben へ送り，そこで新しい便を徴させられるか――それとも便をすぐに Fürstenwalde へ出発させようとなさるかどうかはお任せします。迅速さが非常に望まれております。僕にもこの点をすぐさま返事して下さい。恐らく僕は約3週間の内に皆さんのところへ参り，皆さんがどうすごしていられるかを見ます。僕の，いやむしろ友人の借金を決済致します」（B136）とある。ところが Wormlage で Ulrike に会って重要な話をする旅行が「ひどい歯内潰瘍」のためできなくなったKは9月30日にまた書く，「お話ししたい事は延期されませんので，お願いですが，貴姉が車に乗って僕の所へ来て下さい。……貴姉がお望みなら僕の所に泊ることもできます。貴姉が滞在なさろうとお思いなら，僕はどちらでも嬉しいのですが，でも一日だけ貴姉が必要なのです。そして貴姉がお望みなら同じ車でお帰りになれます。……姉さん，決心して，準備し車にとび乗って下さい。天気は良いし，3日で全部です。それ以上はかかりません」（B137）。それで Ulrike が Dresden のKの所へやって来て短期間滞在する。

Kがこの頃体の具合が悪かったのは，9月25日に Dresden へやって来た Varnhagen に10月6日に出した「僕は2度 Golden Engel へ行ったが君に会えなかった。今日は僕は病気だ。午後お茶を飲みに僕の所へ来ませんか。お楽しみになれますよ」（B139）でも証されているようだ。

Varnhagen は「およそ2週間滞在して，Kleist を訪問する予定」で Dresden へやって来た。その Varnhagen は Fouqué (Nennhausen) が9月26日付で「H. Kleist によろしくお伝え下さい。彼の Phöbus の最近号〔4/5号〕の Robert Guiskard を読みましたか？　それは僕に全体を完成して欲しいという気持を起させました。それを読んで下さい，そして僕に

それについての批評を書いて下さい。その号にある別の断篇 Das K. v. H. はそれに反して僕にはひどく不快に思えます，でも僕は丁度，後者が彼の友人達に非常な喝采を博したと聞いております。——君は恐らく君がこちらで会った人の兄の Pfuel に，Kleist の親友ですからいつか Dresden でお会いになるでしょう。彼にも僕からよろしくと申し上げて下さい。……僕は君に Adam についてどう言うべきでしょうか？ 僕は今でもはじめのようなのです，全部ではありませんが，でも沢山の悪い点がある，少くとも Phöbus にとってそう思うのです。正直に言えば，これは判断そのものというよりは先入見なのです。……君はそちらで Schubert 博士とお知り合いになっているでしょう。Ernst Pfuel が非常に有益だといった自然哲学者と」（L 289 b）と書いている。しかし Varnhagen は Fouqué に「Kleist がここにいないので僕が Pfuel を見つける事ができぬのは非常に残念です。しかしもし彼が皆の信じているように，二，三日のうちに帰ってくれば，僕も恐らく Pfuel を彼と一緒に訪問する事ができます…… Schubert 博士と僕は知り会っていません，彼は病気とのことです……画家 Hartmann と Herscher〔Varnhagen の旅の同伴者〕が知り会いました，僕は彼ともう二，三度も会いましたが，彼について親切だともそうでないとも言う事はできません」（L 289 c）と10月13日に返事をするように「H. v. Kleist とまだ全然会っていません，彼は旅行に出たし，好意ある手紙（上記B 139）をあらかじめ送ってよこしました，しかしその時すでに Leipzig へもう旅行に出かけていました」という状態である。

Kは6日すぎに Leipzig へ出かけたが10月中に帰っている。こうした努力の間に11月2日付 Ulrike 宛書簡の中に「本屋 Walther が Phöbus を引受けて支払を全部支弁しています」（B 140）とあるように10月中に Walther に Phöbus を引受させたのだろう。しかしまだKは2週間で戻るという旅行に出かけでる。即ち「僕はたった今，貴姉がこの Dresden においでの際いくらか僕がお話した v. Haza 夫人のことで〔Haza 夫人は当時夫と離婚しようとしていた，その夫の所領が Lewitz, Krs. Meseritz にあった。彼女が Dresden で同棲していた A. Müller のためにKは仲介の労をとっていたのだった〕 Posen 在の Lewitz へ出発」したのだった。しかしあいかわらずの経済事情の苦しさは「僕はまた Lausitz を通りますので，今度は Pannwitz への借金を支払えるものと思っていました，でも支払が僕の手に負えなくなっておりますので，支払うことはできません。親切心がおありになれば，僕が Pannwitz に借りている 20Rth. を支弁して下さい，彼に借金している事は僕を苦しめません，でもそれを彼に立替えた Minette に借金している事が苦しいのです」の文面でも判る。実はKは Haza 夫婦がもう一度元の鞘に戻る事を願い努力していたのである。「v. Haza 夫人は親切な立派な人です，僕が彼女の為にした第一の事は最後の事をするのを全く不可欠のものとします」（B 140）という風に努力し，その為Kと Müller の間に本当の喧嘩が起ったのである。

確かに当時 Böttiger が Allgemeine Zeitung（9月21/22日号）に「年の始めに Wien や Dresden から巣立った Prometheus や Phöbus は出版物が外面的上品さや慎重さに拘らずやっと緑の枝に達し得たのだった。殆んど全ての寄り合雑誌といったものが虚弱であり，そして最上のより新しいものすら……法外な努力によってだけ存続できる」（L 290 a）と伝え，F. Schlegel も10月8日に出版主 F. Wilmans に「小生としましても Europa を継続したい気持です。そして高度の要求もしようとしていた多くの雑誌が丁度中止になっているので，恐らく現在という瞬間益々それは有利です。そのように Einsiedler-Zeitung がなっています

し，Dresden の Phöbus，当地の Prometheus には殆んど間違いなく同じ運命がさし迫っています」（L 290 b）と書いているように雑誌の維持が難しくなって来ている。

前述のように10月中にKは Phöbus の出版を Walther に引受けさせたのだが，前述の Böttiger は10月21日 Cotta に Phöbus の運命について意見を聞いたりしているのである。即ち「友よ，新年から Kleist と Müller が編集し，5号で失敗した Phöbus が貴殿の書店で出版される事に決まりましたか？ その事が少くともここの人達に当地で一般に述べられています。小生は既に今貴殿が Kleist の Penthesilea の出版を引受けておいでなのに「驚きました……とにかく貴殿がそれほど多く重要な機会に立派な男子たる小生の友である実をお示しになっておいでです。貴殿は小生につい先の Leipzig の大市で心からの握手で，小生が貴殿に小生が貴殿の興味を惹くと思われる事を全部書けとおっしゃいました。……小生はこの Phöbus に心底から興味を持っておりまして，その繁栄を喜んでおります。というのは小生は我々の Dresden から好意以外の何も生じない事を望んでいるのです。しかし言うにいわれぬ間，この人達全てを自分の側で扱い，ただ Ossian の亡霊のように霧雲の中でゆったりと来なければならなかった闇が，非常に大きな購買層に作用し，彼らを間もなく無関心にさせる全ての物の完全な知識の欠如と結びつき，その結果すでに最初の5号で2000ターラーの欠損を加えたのでした。小生が疑問に思いますのは，この人達がその論文の精神を変え，多様性や明朗性によって気に入れられようとする事です。……」（L 291 a）これに Cotta は11月11日返事をし，「出版者達は，今1400ターラーの欠損後，当地の Walther 書店の継続に，ただそれが印刷されるべく，全然報酬なしに引渡されました，そしてこの書店は7号をただ150部だけ印刷します。勿論 Seckendorf の Prometheus にははるかに多くの望みが抱かれているでしょうし，小生はそのためには調停をしたいとも思っています。しかも〔出版者〕Geistinger 氏自身，小生に書いてよこして継続を委任しました。しかし運命はそのような出版に小生を用心させます。小生はきっと，信用できる友人たる貴殿と始めに談合してからでなくては何も計画しません」（L 291 b）と述べている。Cotta はこのように雑誌界の不振の中に Phöbus と Prometheus の合併を企画したが，それを相互の当事者達も気が進まず，Cotta も結局この Prometheus を引受ける事に踏み切る事ができず，駄目になってしまったのである。

そして Prometheus はますます悪くなって行って中絶してしまい，一方 Phöbus は Walther 書店によって継続される事になった。それが「Zeitung für d. eleg. Welt」（11月2日号），を始めとして「Morgenblett」（12月22日号），その他「Freimüthige」，Jena の「Allg. Literaturzeitung」，Wien の「Sonntagblatt」に次のような広告で知らされている。

「Phöbus の関係者に

Dresden で出ている文芸誌はこれまでの事態の不首尾から早急の継続が遅れておりましたが，この間に Staël 夫人や F. Schlegel, L. Tieck 諸氏の参加で雑誌の規模も拡大し，この雑誌の未来の為に種々の障害も克服されました。

ただ今 Phöbus の6号が出て発送されたところであります。しかし出版者の個人的な面でもドイツ書店の現状も自費出版を許さぬ状態でありますので，Walther 宮中御用書店が当地に於てこの雑誌の出版を決意し，7号から引き継いでお届け致します。それで滞っている6号は今後今年中にもこの書店から発送される事になります。従って各書店とも，又この計画の他の後援者も，同じく今後は Walther 書店へ御注文下さるようお願い致します」（L 294）。